

こなたとこころに 市民憲章

1. 富士山のように美しく
自然を愛し
きれいな環境をつくります



バラの手入れを10年

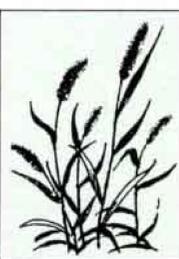
バラは、市民の花。市内のあちこちで見られます。

市立富士体育館近くのバラ園は特に手入れが行き届き、「だれがやってくれているんだろう」と言う声をよく聞きます。うわさの主は、依田橋町の松田昭平さん64歳。もう、かれこれ10年になるそうです。

何しろ「人に見られるのが嫌」で、作業を始めるのは午前5時。それも、雨の日以外は毎日です。雑草を取り、空き缶を拾い、しおれる前の花を摘んだり。8月末には、秋に咲く花のために、仲間の木又将実さんや長谷川邦泰さんらと剪定作業に入ります。



—— どうして富士市へ
喜久さん「私、むだなものは何もないって思う主義。草取りをしたときの雑草や、人との触れ合いを草木に託して押し花にしているの。そんな檜原村での生活が本に載ったら、『どうしたら、あなたのよう
に生きられるんですか』って電話をくださったのが富士市の野田さん。自分を磨くためにやっている押し花を、教えてくれなんて言われて困っちゃったんだけど、昨年
から駅南の公民館で講座を開いたりして。向こうから通ってくる



吸い取られそうな感じね 富士山って

ことしの四月、富士市を永住の地と決めて、東京都西多摩郡檜原村から石川潔さん(七十八歳)と喜久さん(七十一歳)ご夫妻が、松岡へ移って来られました。喜久さんは、押し花の先生としてかなりの有名人。個展では、温かい作品がいつも大好評です。

のも大変だし、移って来たのは富士山の魅力と、野田さんご夫妻のお人柄なんでしょうね」
—— 近くで見る富士山はいかが
喜久さん「五十年前、生まれ育った田園調布からでも富士山は見えたけれど、はるかかなたの山。近くで見ると、まるで泉のように吸い取られそうな感じね。時は移り、時代は変わっても、富士山だけは健在なんだと感慨無量でした」
—— 富士市の住み心地は
潔さん「川が縦横に流れ、水も豊富だね。檜原村のわき水もおいしかったが、比べると富士の方がおいしいように思う。どこの家も庭木を大事にして、緑がきれいだね」
喜久さん「富士市に移ったからと言うと、みんな『よかったね』って言うってくれます。新幹線で来ると『こんなに近いの』って」
潔さん「だけど、JR富士駅と新富士駅の遠いのは困るね。バスに乗ろうとしても、一時間に一本くらいだから」
—— ありがとうございました。



自 前の歌曲とオペラの夕べ。まあ、とにかくよく笑う皆さんです。三十分間一緒にいたら、澄んだ声のせいか笑い声もオペラ風に聞こえ、だんだん楽しい気持ちになってくるから不思議です。今は、「歌曲とオペラの夕べ」の準備で大忙し。すべて自前で手づくりの公演も、こととして既に三回目。不思議パワーが全開する時です。



市村ひろみさん

不思議パワー全開
歌曲とオペラアリアを歌う

市村ひろみ 萩原明美さん 阿川浩美

三 人三様の歌い方。
一番高い声のソプラノは、萩原明美さん。少し暗めの悲劇のヒロインタイプ。次のメゾソプラノは、市村ひろみさん。個性的で魅惑的な役どころ。もう一人のメゾソプラノ阿川浩美さんは、明るい高い声だから若い陽気な役割を演じます。
役どころを決められて歌うオペラアリア。三人三様の歌い方が見ものです。
人 間楽器。
本番は八月二十四日。「歌い手は、自分の体が楽器なの。胸の厚みは、ほらすごいのよ。いい舞台にしたいから、自分をコントロールして、おいしいものを食べて、体調を整えて」。歌をきっかけに知り合った三人。三人だから分かち合える喜び。三人だから見つけられる次のステップ。暑い夏になりそうです。



萩原明美さん



阿川浩美さん